

機械の調節に没頭していた青木剛(27)が息ついたらを見計らって、安部育美(23)が1本のねじを手に駆け寄ってきた。「ここをきれいにするには、どうしたらいいですか」。軸に刻まれたらせんを指さした。青木は首をかしげた。いくら凝視しても傷一つ

## 上昇らせん 「ねじガール」6年

見つからない。ルーペで覗いてみると、谷の部分の表面にかすかな剥離があった。「金型の傾斜を強めたら、0.05mmの薄板を使うといい」。助言しながら、「そんなに細かいところに気付くのか」と舌を巻いた。

### ②後輩の質問攻め

# 見て学んだ技 理屈に

2014年、興津螺旋(らせん)製造部に配属された新人の安部が、青木に「弟子入り」して3カ月後のことだった。機械の操作を覚え始めた彼女は、1日10回以上、質問にきた。青木は驚いた。地元の工業高を卒業してから、ねじのらせん加工一筋。男性だけが働く現場で生きてきた。仕事での先輩たちは、ほとんど無口。「見て覚えろ」とだけ言った。

ねじの使いやすさは、見た目の美しさに比例する。美しいねじはドライバーの食いつきが良く、軸がぶれず、緩まない。肝心なのは、製造機のセッティング。2枚の金型に挟んで転がすことで、らせんが刻まれる。鋭い山立ちを施すため、金型同士の幅や傾きを100分の1mm単位で調整していく。複数のポルトを締めたり緩めたりと、極めて地道な作業だ。

新人だった頃の青木は、先輩の手元をひたすら観察し、見よう見まね

を繰り返した。自分の工夫と加減一つで、より美しいねじを生み出せるという、のめり込んだ。完成度の高さや生産量の多さなど、何かしらのこだわりを持たない人は、数年もせずに職場を去っていった。厳しい仕事を自負するからこそ、初めは「女性には無理」と思い込んでいた。「前例がない。ただそれだけの理由だった」先輩にしつこく尋ねるのをためらいがちな男性と違い、後輩の女性は分からなければ「分からないう」と何度でも口にする。質問されるたび、自分の答えが正しいかどうか、どきどきした。「納得させられる答えを返さなければ恥ずかしい」。そんな思いに駆られた。

見よう見まねで身に付けた感覚を、どう説明するか。作業標準書(マニュアル)をめくる頻度が増えた。一つ一つの作業をなぜやるのか、理由を考え始めた。それまでは漠然と、手順の確認が目的だった。

らせんの深さを調節するときは、「このポルトをこれくらい締めて」と手元を見せていた。「1周で金型の間が1mm縮まる。4分の1周締めて」。具体的な数字を伝えるようになった。

「感覚でやってきたことを理屈に落とす癖が付いた」。気付けば、自分のミスも減っていた。機械の不具合に直面した時、以前なら最初から設定をやり直すことが多かったが、原因を突き止めるまでの時間も早くなった。安部の質問攻めは3日に1回のペースに減ったが、彼女の気付きには今も驚き、学ばされ続けている。(敬称略)



ルーペで製品の仕上がりを確認する青木剛さん(右)と安部育美さん  
=11日、静岡市清水区の興津螺旋

こちら女性編集室

Women's CHOICE